

藤島城跡

第7次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第232集



2019

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター



ふじしまじょうあと

藤島城跡

第7次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 232 集

平成 31 年

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター



序

本書は、公益財団法人山形県埋蔵文化財センター（平成 24 年 4 月 1 日に財団法人から移行）が発掘調査を実施した、藤島城跡第 7 次調査の調査成果をまとめたものです。

藤島城跡は山形県鶴岡市藤島にあります。築城年代は不明ですが、南北朝時代には南朝方の出羽国での拠点があったとされる城です。その後、土佐林氏の居城となります。戦国時代に入り大宝寺氏に滅ぼされると大宝寺氏、最上氏、上杉氏と城主が変わりました。

上杉氏に支配された天正 18 年（1590 年）には、検地に反対する国人一揆の拠点となりました。慶長 5 年（1600 年）の慶長出羽合戦により再び最上氏の支配下に入り北楯大堰や因幡堰の建設で名を挙げた新闖因幡守久正の居城となります。元和 8 年（1622 年）の最上氏の改易により廃城となります。

明治 34 年（1901 年）、城跡に山形県立庄内農業学校（現 山形県立庄内農業高等学校）が建設され、庄内地方の農業教育の中心施設として農業分野に留まらず地方自治、スポーツ、芸能など多岐の分野にわたる数多くの優秀な人材を輩出し続けています。

藤島城跡では、これまで校舎の建て替えなどに伴い、度々発掘調査が行われており、今回の調査で 7 回目にあたります。これまでの調査では、土佐林氏の威令が窺われる数々の遺構や遺物が検出、出土しています。今回の山形県立庄内農業高等学校ライスセンター改築事業に伴う調査でも、15～16 世紀を中心とした陶磁器が出土しています。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先のつくり上げた歴史を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちに課せられた重要な責務と考えます。その意味で本書が文化財保護活動の普及啓発や、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりますが、当遺跡を調査するに際し御支援、御協力いただいた関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

平成 31 年 3 月

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 廣瀬 渉

凡　例

- 1 本書は、山形県立庄内農業高等学校ライスセンター改築事業に係る「藤島城跡」の発掘調査報告書である。
- 2 速報会資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。
- 3 調査は山形県教育庁総務課の委託により、公益財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 本書の執筆は、齋藤健、吉田満が担当し、齋藤稔、黒坂雅人、伊藤邦弘、須賀井新人が監修した。
- 5 遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第X系（世界測地系）により、高さは海拔高で表す。方位は座標北を表す。
- 6 今回の調査で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。遺構の分類記号は、遺構検出時に付けたものを報告書でも踏襲した。そのため、その後の検討の結果、報告書の遺構分類記号と遺構の種類が異なるものもある。

SK…土坑 SD…溝跡 SE…井戸跡 SP…ピット SX…性格不明遺構
T…トレンチ RP…登録土器・陶磁器

- 7 遺構・遺物実測図の縮尺の用法は各図に示した。網点については、以下のとおり。



地山（遺構断面図）



石（遺構平面図・断面図）

- 8 基本層序および遺構覆土の色調記載については、2008年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」によった。

調査要項

遺跡名	ふじしまじょうあと 藤島城跡		
遺跡番号	423-034		
所在地	山形県鶴岡市藤島字古橋跡 221		
調査委託者	山形県教育庁総務課		
調査受託者	公益財団法人山形県埋蔵文化財センター		
受託期間	平成 30 年 4 月 1 日～平成 31 年 3 月 31 日		
現地調査	平成 30 年 5 月 28 日～7 月 6 日		
調査担当者	業務課長	伊藤邦弘	
	調整主幹(兼)課長補佐	須賀井新人	
	専門調査研究員	齋藤健(調査主任)	
	調査員	吉田満	
調査指導	山形県教育庁文化財・生涯学習課		
調査協力	山形県立庄内農業高等学校		
	鶴岡市教育委員会		
	山形県庄内教育事務所		
	山形県庄内総合支庁建設部建設課		
	公益財団法人藤島文化スポーツ事業団		
	社会福祉法人鶴岡市社会福祉協議会藤島福祉センター		
業務委託	基準点測量業務	株式会社鈴木久測量設計事務所	
	空中写真測量業務	株式会社ワクニ	
発掘作業員	伊藤雅子	佐藤正規	武田桂三
	太田清治郎	志謙久悦	兵田悦
整理作業員		土屋真一	(五十音順) 安田茂

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経緯	1
2 調査の方法	2
II 立地と環境	
1 地理的環境	3
2 歴史的環境	3
III 調査の成果	
1 調査の概要	8
2 遺構と遺物	8
IV 調査のまとめ	22
報告書抄録	卷末

表

表 1 遺跡一覧表	7
表 2 遺物観察表(1)	20
表 3 遺物観察表(2)	21

図 版

第 1 図 「筆渡跡理」添付図	1	第 7 図 SX66	14
第 2 図 調査概要図	2	第 8 図 SK46・SK63・SP40、SP68・SK53、SP25、SK51・ SP13	15
第 3 図 調査区周辺字限図	4	第 9 図 SK84・SK83、SK54、SK50、SK23	16
第 4 図 遺跡位置図	6	第 10 図 出土遺物(1)	17
第 5 図 遺構配置図	12	第 11 図 出土遺物(2)	18
第 6 図 基本層序(北壁)、SP38、SK29、SE71、SP30・31	13	第 12 図 出土遺物(3)	19

写真図版

写真図版 1	調査区全景	写真図版 6	SK51 土層断面・完掘状況、SK84・SK83 土層断面、SK84 完掘状況、SK54 土層断面、SK50 土層断面・完掘状況、SK23 土層断面
写真図版 2	調査区遠景	写真図版 7	SE71、SD20、SK23・50・54・84、SP5 出土遺物
写真図版 3	調査区全景(調査前)、調査区北壁基本土層、 調査区東壁基本土層	写真図版 8	SP7・57、SX19・66 出土遺物
写真図版 4	SE71 土層断面・完掘状況、SP38 土層断面、 SK29 土層断面、SP30・31 土層断面、SK46 土層断面、SK46・SK63 土層断面、SK46 完掘状況	写真図版 9	SX66、遺構外出土遺物
写真図版 5	SX66 土層断面・完掘状況		

I 調査の経緯

1 調査に至る経緯

藤島城跡は鶴岡市藤島字古橋跡に所在する中世の城館である。長年、羽黒山別当職を務める土佐林氏の居城であったが、戦国時代末期になると大宝寺氏、最上氏、上杉氏、再び最上氏と目まぐるしく主が変わり、因幡城の開削事業で知られる最上氏臣家新関因幡守久正が最後の城主で、元和 8 年(1622 年)に最上家が改易されるとともに廃城となっている。以降、本丸跡に八幡神社が建てられ、他の城地は耕地として使用されていたことが、庄内藩士安倍親任により幕末に編纂執筆された『筆濃除理』の模式図により窺われる。(第 1 図)

明治 34 年(1901 年)9 月 12 日には、新設されたばかりの山形県立庄内農業学校(現:山形県立庄内農業高等学校)が移転してきて、それ以降は数度にわたる改築

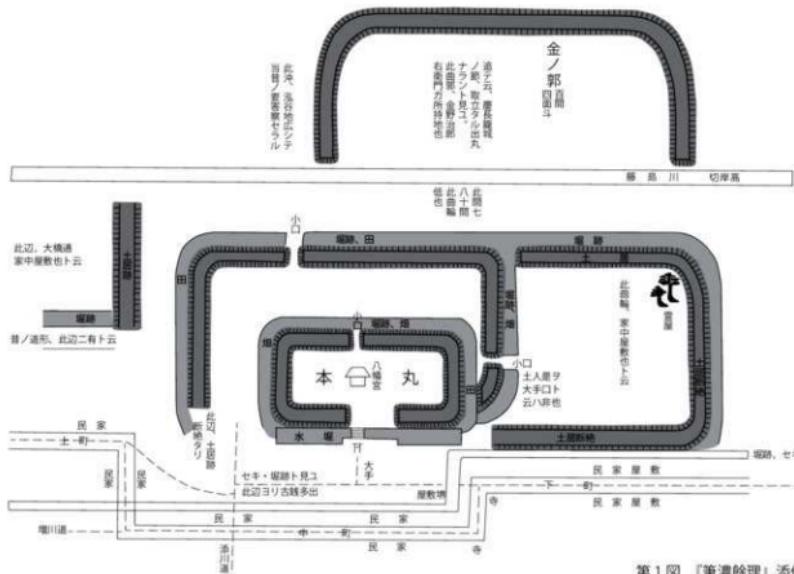
や敷地の拡大を経ながら、ほぼ全ての遺跡範囲は学校敷地として一貫して利用してきた。

本遺跡では、昭和 54 年の藤島川河川改修事業に伴って初めて発掘調査が行われて以降、山形県立庄内農業高等学校施設の改築や新築等により、平成元年に 2 度、平成 3 年、平成 4 年、平成 5 年と発掘調査が実施され、今回で 7 度目の発掘調査になる。(第 2 図)

今回の調査原因は、山形県立庄内農業高等学校ライスセンター改築事業(以後、事業)である。

当校のライスセンターは、藤島川左岸の校地に所在するが、老朽化が激しく耐震基準も満たしていないために調査区に移転改築することになった。

調査に先立ち、平成 29 年に、山形県教育委員会(以後、県教委)によって試掘調査が行われ、中世の陶磁器の出土を得た。これを受け、県教委との間で協議が進められ、



第 1 図 『筆濃除理』添付図

I 調査の経緯

記録保存を目的とした調査を行うこととなり、公益財団法人山形県埋蔵文化財センター（以後、埋蔵文化財センター）が調査の委託を受けた。

2 調査の方法

A 発掘調査

調査は工事用図面に基づき、事業範囲 237.6 m²を対象に実施した。

調査は、調査区を設定することから始めた。

調査事務所を設置した後、5月 28 日に機材を搬入し、調査区外縁に設定したトレンチを手掘りで掘り下げ、遺構検出面を確認した後に 5月 30 日から重機で表土の掘削を行った。その後、外部委託して基準点杭と方眼杭を設置し、面整理作業を経て、遺構の検出作業を行った。6月 6 日に検出状況の全体写真撮影を行い、遺構の精査作業に着手した。さらに、必要に応じ土層断面図の作成、記録写真撮影も行った。7月 3 日に、空中写真測量を実施した。7月 5 日には事業者に調査成果の説明を行って

調査区の引き渡しについて打ち合わせを行った。7月 6 日には機材の撤収を行い、次の週には調査事務所などの施設の撤去も完了した。

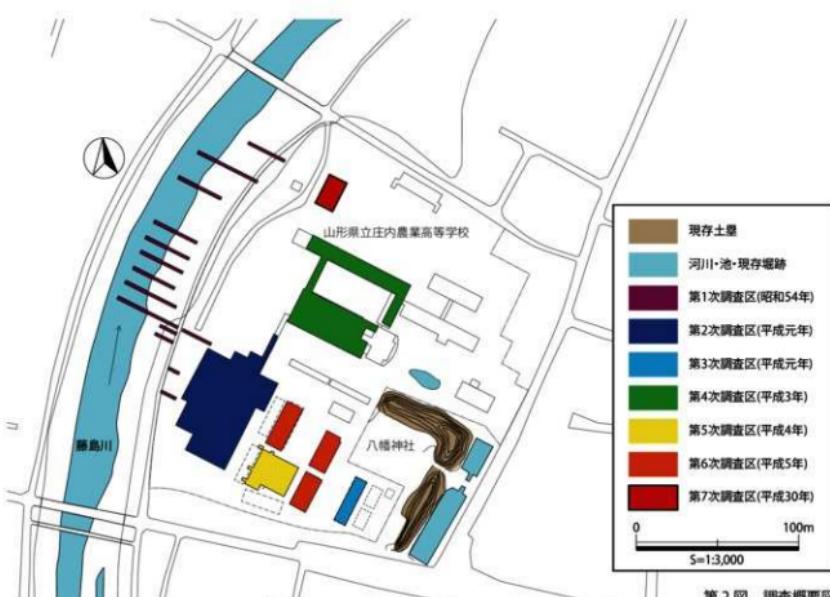
B 整理作業

調査終了後、出土遺物や記録類は埋蔵文化財センターに運び、整理作業員を雇用して整理作業を実施した。

まず、出土遺物の洗浄・注記作業を行った。注記は、遺跡名「フジシマ」の後に必要に応じて出土遺構名や層序を記入した。

そして、遺物の接合作業を実施し、完了したところで遺物実測作業に入った。その後、実測図のデジタルトレンスや、遺物の写真撮影を行った。編集・原稿執筆作業を行い平成 30 年度内に報告書を刊行した。

陶磁器類の実測は、外形線と断面のみ作製し、磁器の外面の文様や軸調は、はめ込み写真により表現した。縮尺は概ね 1/3 を原則で掲載したが、瓦は 1/5 で、古錢については 1/1 で掲載した。



II 立地と環境

1 地理的環境

藤島城跡は、山形県鶴岡市藤島字古橋跡に所在する。JR羽越本線の藤島駅の東約500mに位置し、地目は学校用地が大部分を占め、他は宅地として利用されている。藤島川東側の自然堤防上に位置し、標高は約11~12mを測る。

現在の鶴岡市は從来の鶴岡市、羽黒町、櫛引町、朝日村、温海町、そして当城跡が位置する藤島町が合併し、平成17年10月1日に発足し、山形県内最大の面積を有する自治体となった。

鶴岡市は山形県の北西部、庄内地方の南部に位置し、西に日本海を臨み、東は出羽丘陵により内陸地方と隔てられ、南は新潟県と境を接している。

庄内地方は、最上川水系や赤川水系の諸河川によって扇状地が形成され、東西15km、南北50kmにわたる肥沃な庄内平野が広がり、日本有数の穀倉地帯としても有名である。

鶴岡市南東部には出羽三山の月山・羽黒山・湯殿山を臨み、その月山を源流とする藤島川は藤島地域の中央を蛇行しながら北流して京田川に合流、さらに河口付近で最上川と合流して日本海に注ぐ。

鶴岡市藤島地域は、穀倉地帯庄内平野のほぼ中央に位置し、古くから稲作を基幹産業として発展してきた。河間低地、後背湿地及び扇状地を地形とした平野が広がり、農業に適した環境になり、地域面積の6割以上が農地として利用されている。藤島川流域には約3,900haの肥沃な耕地が広がり、山形県水稻奨励品種で全国的に人気上昇中の「つや姫」の誕生の地としても有名である。

2 歴史的環境

藤島城跡は、鶴岡市藤島地域を北流する藤島川の自然堤防上に位置する中世の城館跡である。周辺にも多くの遺跡が確認されている。

藤島城跡は、これまで山形県教育委員会・埋蔵文化財センターによる発掘調査が6次にわたり実施されている。

昭和54年の藤島川河川改修事業に伴う発掘調査（第1次）に始まり、それ以後（第2~6次：平成元年~5年）は、現在の県立庄内農業高等学校の施設建設に伴う発掘調査が行われている。第1次調査では、藤島城跡の外郭西側に相当する藤島川の河川敷が対象となり、トレンチ調査が行われ、当該地域からは外郭を構成する土塁の存在が確認されている。第2~6次調査では、校舎・体育館、温室等の学校施設建設に伴う調査が行われ、断片的ではあるが広く内郭・外郭の様相が明らかとなった。本丸に伴う堀跡や建物跡、井戸跡、土坑、柱穴等の遺構などが検出され、概ね15~16世紀頃の陶磁器等の豊富な遺物が出土している。

A 鶴岡市の遺跡

鶴岡市内の埋蔵文化財包蔵地は570ヶ所を数える。その内、藤島地域には64ヶ所が確認されているが、約半数は奈良・平安時代の遺跡で、旧石器時代・弥生時代・古墳時代の遺跡は極僅かである。藤島地域及び周辺の遺跡を時代毎に紹介する。

旧石器時代の遺跡では、越中山遺跡群が有名である。東北地方旧石器研究の先駆けとなる遺跡である。後期旧石器時代に属し、ナイフ形石器、石刃等の石器や、住居と思われる遺構などが発見されている。

縄文時代の遺跡では、草創期から晩期まで数多くの遺跡が点在する。鶴岡市東部地域において、中川代遺跡や玉川遺跡群が有名である。中川代遺跡からは中期頃の土器とともに「刻文付有孔石斧」が出土している。これは、中国の大汶口文化や良渚文化のものと考えられ、その時代に大陸から渡来してきたものと思われる。玉川遺跡群は、中期から晩期にかけての土器・石製品が多量に出土している。現在は、玉川寺の敷地として利用されている。

弥生時代の遺跡では、鷺畠新田遺跡、郷の浜E遺跡、高寺A遺跡等が挙げられるが、僅かに土器や石器が出土する程度である。庄内地域の全域においても当該期の遺跡は少なく、弥生時代前期頃の砂沢式土器と共に遠賀川系土器・在地土器が出土する生石2遺跡（酒田市）は



山形県埋蔵文化財調査報告書第193集 藤島城跡第5次発掘調査報告書附図を加筆修正

第3図 調査区周辺字限図

山形県内の弥生時代の遺跡では有益な成果を得ている。古墳時代では、旧藤島町域の添川地区の鶯畠山古墳、添川古墳等がある。鶯畠山古墳は1号墳(円墳)、2号墳(方墳)、3号墳(方墳)の3基確認されており、1・2号墳の学術調査が実施されている。1号墳については、地元の有識者を主体とする発掘調査が3次に亘り実施され、墳丘の構築方法が確認されている。2号墳については、東北芸術工科大学考古学研究室による調査が実施され、古墳時代前期まで遡ることが明らかとなった。また、同じ旧藤島町三和地区内からも古墳時代前期の土器器資料が出土している。

奈良・平安時代では、平形館跡、上蛸井遺跡、石欠遺跡、西山遺跡等多数の遺跡が存在する。平形館跡の周辺には「古郡」の地名が現在にも残り、郡衙関連の施設の存在が窺われているが、詳細は定かではない。

中世では、当城跡の周辺に平形館跡・向館跡・方眼寺館跡等の城館跡が集中している。また、旧藤島町教育委員会により発掘調査が行われた勝楽寺遺跡・中山庵寺跡・上蛸井遺跡等の寺院跡や集落跡も存在する。

B 藤島城の沿革

藤島城の築城は14世紀の南北朝時代にさかのぼると言われるが、その時期の遺物はこれまでの調査で出土しておらず、不明である。

14世紀中頃から土佐林氏の居城となり、15世紀中頃に土佐林氏は羽黒山別当職に就任し栄えた。以降、尾浦城主大宝寺(武藤)氏との対立と服従を繰り返した。

天文年間、藤島城主土佐林禪棟は大宝寺氏の重臣として大宝寺氏の庄内制圧を支えた。しかし、大宝寺義氏との対立が先鋭化し、元亀2年(1571年)に土佐林禪棟は義氏に攻め滅ぼされ、藤島城は義氏は弟の義興に与えられた。

天正11年(1583年)、大宝寺義氏が家臣の謀反で横死すると、義興が家督をついで尾浦城に移り、藤島城は家臣の小國彦次郎が城代として預かることになった。

天正15年(1587年)、最上義光が庄内に侵攻し、大宝寺義興が自刃すると、藤島城も最上氏の支配下に置かれたが、翌年に義興の養子大宝寺義勝が、実父の本庄繁長と共に越後から侵攻し、庄内から最上氏を駆逐した。

大宝寺義興は、豊臣秀吉から庄内領有を公認され、藤

島城に栗田刑部を配するとともに、領内でいわゆる太閤検地を実施した。

天正18年(1590年)、平形館主の平賀善可を中心の一揆を起こして大宝寺城を攻め落とし、藤島城は地侍金右馬允が占拠した。秀吉の命を受けて上杉景勝家臣の直江兼続が討伐に乗り出し、大宝寺城を奪還したが、藤島城を落とすことはできず、一揆勢と和睦をして越後に撤兵した。翌年、直江兼続は再度藤島城を攻め、激戦の末に落城させた。この一揆により、本庄繁長・大宝寺義勝父子は改易されて庄内は上杉領となり、藤島城には木戸玄斎が配された。

慶長5年(1600年)の関ヶ原の戦いにともなう慶長出羽合戦により、最上義光が庄内を制圧し、領有を認められた。藤島城には新闇因幡守久正が7000石で入った。

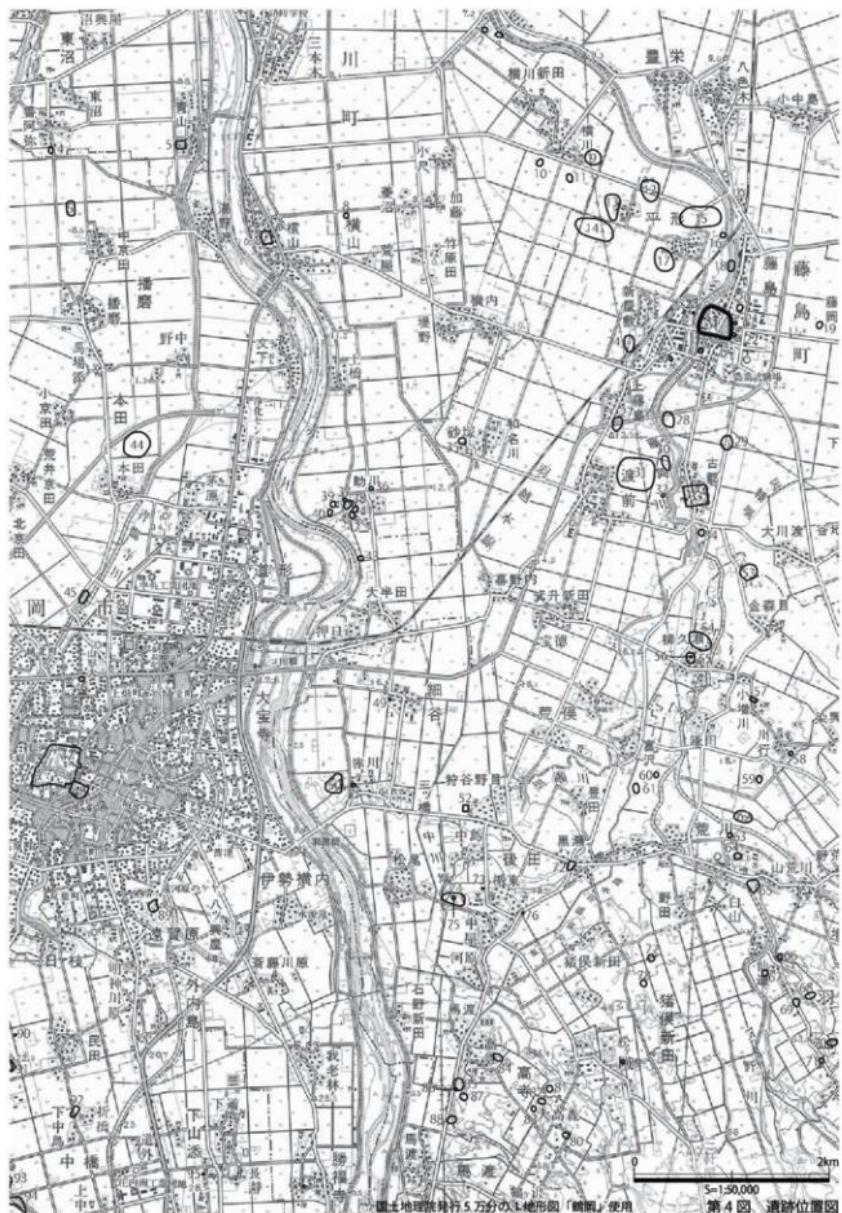
しかし、元和8年(1622年)に最上氏が御家騒動で改易され新闇久正是古河城主土井利勝に預けられ、藤島城は廢城となった。寛永元年(1624年)に新闇久正是古河で没したが、遺言により藤島の法眼寺に葬られた。

新闇久正是、因幡城や北楯大堤の計画や施工に深く関わり、高く評価されている。

江戸時代、廢城された藤島城跡は、本丸に八幡神社が祀られ、他の城跡は農地となっていた。また、藤島城北側には、庄内藩主が参勤交代時に立ち寄る休憩所としての屋敷も建てられていた。幕末の庄内藩士安倍親任は、庄内の歴史や地理をまとめた『筆叢餘理』を記している。その中に藤島城に関する記述もあり、当時の縄張り図も添付されている。(第1図)

明治34年(1901年)9月12日には、新設されたばかりの山形県立庄内農業学校(現:山形県立庄内農業高等学校)が当地に移転し、現在に至っている。

大正14年(1925年)刊行の山形県による史蹟名勝天然記念物調査報告によると、「今本丸の土壘及水濠の一部を残すに過ぎず、外郭は土壘は崩されたるも水濠の跡田となりて存し、その形状を想見するに足る。」と記されており、添付図面にからは現在校地になっている部分にも水田があったことが窺われる。また、本丸の西外の第5次、第6次調査区周辺には「焼米」と記されており、そのあたりから炭化米が出土したとみられる。



国土地理院発行 5万分の1地形図「鶴見」使用

第4図 遺跡位置図

III 調査の成果

1 調査の概要

今回の藤島城の発掘調査は、7度目のものとなり、校地北側の237.6 m²を対象に実施した。本丸北側の郭に相当する。『筆濃餘理』の添付図(第1図)で、松の木らしき樹木の絵とともに「畫屋」という施設名と「此曲輪、家中屋敷也ト云」という説明書きがある地点周辺である。農業高校移転以前の明治期の字限図をみると、細かく耕作地として分筆されていたようである。さらに、長年校地として使用されたため、かつての面影を窺えるものは何もない。

調査では、表土を60~70cmほど重機で掘削し、ジョレンを用いて面整理作業を行い遺構検出作業を行った。

地表面から40~50cmまでは、近代以降の学校施設造営のためとみられる盛土整地による層である。それ以下は近世以前の層である。(第6図基本層序)

遺構検出面には所々近代以降の学校施設による搅乱跡が見られ、一部の遺構は破壊されていた。

2 遺構と遺物

以下、遺構と遺物について述べる。

A 遺構

遺構の数量は多くはない。遺構は調査区の東半分と南側に集中しており、西半分にはほとんど確認することができなかった。

地山は黄褐色の砂で、藤島城に伴う遺構では当時の表土であるシルト質で褐色の埋設土を、他の新しい遺構からは地山と現在の表土が混じった埋設土を観察できた。

遺物を伴う遺構は少なく、出土遺物も少量で遺存状態が悪く、明確な年代を決定できるものは少なかった。

遺構配置図(第5図)

全体的に柱穴が多く、他にいくつか井戸跡と思しき土坑を検出した。溝跡や堀跡、土塁の痕跡などは検出できなかった。また、柱穴で掘立柱建物跡の組み合わせを確認する事はできなかったが、ほとんどは掘立柱建物跡を

構成した柱穴跡であろうと思われる。

校地や調査区の方角と同方位を向いた直径5cmほどの円礫が詰まった直径約60cmの柱穴列(SP2~10)が検出されたが、他の遺構より新しく特殊であるため、学校施設の柱基礎跡とみられる。他にもそれを囲むような溝跡、調査区南西部にある方形の溝跡、調査区西側に南北方向に走る溝跡などもあったが、これらも他の遺構より新しく、土管や塩ビパイプなど明らかに学校施設や基礎跡に伴うと判断できるものが出土した。また、調査区の西壁と南壁沿いには、緑青色の凝灰岩と思われる石材が並んでいたが、これらも学校施設の基礎と判断した。

(X=136156.61 Y=81092.27) グリッドと(X=136164.59 Y=81080.30) グリッドを結ぶあたりでは、表土が混入する複雑状の滲みのような土色変化が観察できたので、3箇所にトレチを入れて確認した。しかし、深さはまちまちで、5~30cmでそれらの土色変化は消え、断面を観察しても遺構のような層序を確認できず、遺物も全く出土しなかったことから、学校建物の雨落ち溝か一輪車のようなものが頻繁に通行したことにより泥質化し「土が曬んだ」状態になったものと判断した。

SP38(第6図)

調査区の北側、遺構が密集する地区にある。直径約50cm、深さ約20cmで遺物の出土はなかった。柱穴及び柱材を抜き取り埋め戻した跡と考えられる。この柱穴周辺の遺構もほとんど類似した状態であり、同様な柱跡と考えられる。

SK29(第6図)

調査区の北側、遺構が密集する地区にある。直径約65cm、深さ約15cmで遺物の出土はない。柱材を抜き取った跡と考えられる。

SE71(第6図)

調査区のほぼ中央やや北東側にある。直径約130cm、深さ約160cmで遺物が僅かに出土した。層序は5層に分けられるが、土色や性質が似ており、一気に埋め戻されたと思われる。深さや大きさから井戸跡と推測されるが、井戸枠材は出土せず、掘り返されて井戸枠も撤去さ

れた後に埋め戻されたと思われる。

SP30・SP31(第6図)

調査区の北壁近くにある。SP30は直径約50cm、深さ約50cmで遺物の出土はなかった。SP31は直径約50cm、深さ10cmで遺物の出土はなかった。SP30は柱材の抜き取り痕で、SP31は掘り起こした跡の可能性がある。

SX66(第7図)

調査区東壁面ほぼ中央にある。直径約250cm、深さ約100cmで遺物が出土した。今回の調査で最も大きな遺構であった。井戸跡の可能性が高く、周囲にはさらに大きな掘り方を確認できた。上部には、径5cm程度の円礫が詰まつたSP9、SP10の学校施設の柱基礎があつた。遺構内には径約20～30cmほどの礫も出土したが、井戸枠や石組みの痕跡は確認できなかった。遺物は破片ではあるが、今回の調査で最も多く出土している。また、SK50出土遺物と接合していることから、SK50と同時期に廃絶したと考えられ、年代は出土遺物から16世紀代と思われる。

SK46・SK63・SP40(第8図)

調査区北側にある。SK46は、短径約50cm、長径約120cm、深さ約40cmで、土層の堆積状況から、3つとも柱材を抜き取り後埋め戻したと考えられる。SK63は、重複関係よりSK46より古い時代のもので、径約60cm、深さ約20cmである。浅いが、土層の堆積状況から、柱材の抜き取り痕と考えられる。SP40は他の遺構と重複関係はない。径約40cm、深さ約10cmで、極めて浅い単層の遺構であるが、柱穴と考えられる。

SP68・SK53(第8図)

調査区北側にある。SP68は、長径約70cm、短径約50cm、深さ約40cmである。層序の観察から、柱材の抜き取り痕と考えられる。重複関係からSK53より古い。SK53は長径約100cm、短径約60cm、深さ約50cmである。層序の観察から、柱材の抜き取り痕と考えられる。

SP25(第8図)

調査区北側にある。SP25は、径約40cm、深さ約35cmである。層序の観察から、柱材の抜き取り痕と考えられる。

SK51・SP13(第8図)

調査区東壁面やや北側にある。SK51は径約100cm、

深さ約20cmで比較的浅い。遺構は調査区外に延びていて全貌は確認できなかったが、形状は方形で、柱穴とは考えられない。SP13はSK51より新しく、径約70cm、深さ約60cmである。層序の観察から、柱材の抜き取り痕と考えられる。

SK84・SK83(第9図)

調査区南東隅にある。SK84は短径約110cm、長径約160cm、深さ約110cmのやや楕円形で遺物が出土した。最上部に学校施設のガス配管と思われる銅管が横断している。堆積土は大きく2つに分けられ、下部の他の遺構と明らかに色が異なる黒褐色系シルトの土層と上部の褐色の地山砂を多く含む層である。このことから、何らかの機能を果たし黒褐色シルト層が堆積した後に、一気に埋め戻されたと考えられる。他の遺構とは異なり、堆積土内のブロックがはっきり観察できることや伴出した遺物の年代から、近代以降と考えられる。SK84より新しいSK83は直径約80cm、深さ約40cmほどのやや楕円形で、遺物が出土した。堆積土から、桶状のものを埋設した跡で、埋め戻した後に桶状のものは腐食したとみられる。学校施設の一部と思われる。

SK54(第9図)

調査区のやや北側のほぼ中央部にある大型土坑。他の遺構と重複関係はなく、直径約90cm、短径約80cm、深さ約60cmのやや楕円形をしている。堆積土は4層からなるが、似た土層であることから、一度に埋め戻された可能性が高い。遺物の破片が僅かに出土し、概ね16世紀ごろのものと考えられる。

SK50(第9図)

調査区東側のやや北側にある。長径約100cm、短径約70cm、深さ約50cmで、平面形がやや不定形である。柱穴とその抜き取り痕である可能性が高い。遺物が比較的多く出土した。SX66出土遺物と接合していることから、SX66とほぼ同時期の16世紀ごろに廃絶したと考えられる。

SK23(第9図)

調査区北側の東壁面にある。直径約110cm、深さ約100cmである。層序の観察から、幅20cmの柱材の抜き取り痕と考えられる。明確に柱穴と判断できる痕跡があった遺構はここだけであった。砥石が出土した。

B 遺物

今回の藤島城跡の発掘調査で見つかった遺物は、出土量では整理箱で4箱と決して多くはなかった。残存状況も破片が多く、明確な時期特定も困難であったが、時期は大きく2つに分けられる。一つは中世末の15～16世紀頃の遺物で、藤島城存続時と同時期の遺物である。もう一つは近現代の遺物で、山形県立庄内農業学校(現:山形県立庄内農業高等学校)に伴うものである。近世の遺物は出土していない。これらの傾向は以前の調査と同じである。以下、出土遺構ごとに遺物について述べていく。

第10図

1はSE71より出土した珠洲系陶器の甕の胴体部の破片である。外面にはタタキ、内面にはアテの調整痕を確認できた。

2はSD20より出土した瓦器の火鉢の破片である。図上復元すると直径130mm、器高80mmほどの大きさで、上部に径18mmの穿孔が2つ施され、5つほど存在したと思われる。全体に煤けている。近現代のものである。

3はSK23より出土した砥石の破片である。青緑色をしている。紐を通したと思われる穿孔や使用による擦痕を観察できる。

4はSK23より出土した陶器碗の破片である。鉄褐色の胎釉が内外に施釉されており、天目茶碗と思われる。産地は瀬戸美濃であると思われる。

5はSK50から出土した陶器の皿である。瀬戸美濃の灰釉皿で内外に施釉されており、見込部分には菊花状の印刻がされている。底部には輪トチンの付着痕を観察できる。また、割れ口が被熱し煤が付着していることから、灯明皿に二次転用されたと考えられる。大窯1期の所産と考えられる。

6はSK50から出土した陶器の皿の破片で、SX66出土の破片とも接合した。瀬戸美濃の灰釉皿で内外が施釉されており、底部の高台内部は黒く塗られている。5と同時期である。

7はSK50から出土した磁器の碗の破片である。高台付きで内面に花紋と思われる文様が描かれている。文様や高台の作りから、15世紀の景德鎮産の染付花卉紋碗と推測される。

8はSK50から出土した瓦器の香炉と思われる破片である。底部の一部のみ残存しており、高台が付いている。外面に植物紋の印刻が施されている。

9はSK50から出土した石製品である。円錐で一部被熱している。磨り石として分類した。

10はSK53から出土した陶器の破片である。瀬戸美濃の灰釉皿で内外とも施釉されている。

11はSK54から出土した陶器の破片である。瀬戸美濃の灰釉皿で内外とも施釉されている。大窯1期の時期と考えられる。

12はSK54から出土した陶器の破片である。瀬戸美濃の灰釉皿で内外とも施釉されている。見込にはトチンの目跡がある。底部高台内部に煤が付着している。破損後に底部高台内を燈明皿に転用した可能性がある。11とは別個体と見られるが、同時期と考えられる。

13はSK54から出土した古銭である。北宋錢の「元祐通寶」である。銭名もはっきり確認できる比較的良好な状態である。

14はSK84から出土した陶器の破片である。瀬戸美濃の灰釉皿で内外とも施釉されている。

15はSK84から出土した陶器の破片である。無施釉で、珠洲系の壺と思われる。

16はSK84から出土した磁器の皿である。直径は112mmほどであったとみられる。染付で内外とも施文されているが、底部と見込部分には施釉されていない。

17はSK84から出土した磁器である。染付の碗と思われ、外面に花状の施文が施されている。

18はSK84から出土した土師器である。平安時代の壺の一部と思われる。だいぶ摩耗している。

19はSK84から出土した石製品である。砥石の破片で、中砥と思われる。

20はSK84から出土した石製品である。砥石の破片で、中砥と思われる。

21はSK84から出土した古銭である。三枚が癒着していると思われ、銭名は判読不能であるが、中央には四角い穴があり、前近代の貨幣ではある。糊が付着したような痕跡を確認できる。

22はSK84から出土した金属製品である。近現代の鉛管と思われ、鋸で切断したような波紋がある。

23はSK84から出土した鉛津である。

24はSK111から出土した磁器である。口縁部だけの破片であるが、内外に施文された染付である。16世紀ごろの輸入磁器とみられる。

25はSK112から出土した陶器である。口縁部の破片であり、瀬戸美濃の皿である。

26はSP3から出土した磁器である。青磁の碗で外面に雷文が施されている。

27はSP5から出土した石製品である。石鉢の破片で、内外面とも被熱しており、内面が摩耗し使用した痕跡がある。

28はSP7から出土した陶器である。鉢の破片で、鉄釉が施された近現代の鉢の破片である。

29はSP7から出土した磁器である。薄手で染付の花瓶であるとみられる。近現代のものと思われる。

第11図

30はSP8から出土した陶器である。内外に施釉された近現代の鉢と思われる。

31はSP10から出土した磁器である。青磁の碗で外面に蓮弁文と思われる文様の一部を確認できる。15～16世紀頃のものが新しい造構に混入したとみられる。

32はSP39から出土した陶器である。瓷器系の甕の破片である。

33はSP57から出土した石製品である。砥石の破片で、中砥と思われる。

34はSP92から出土した磁器である。青磁花瓶の口縁部の破片である。

35はSP92から出土した磁器である。染付の碗の口縁部の破片であり、外面に植物紋が施されている。近現代のものと思われる。

36はSP114から出土した磁器である。青磁の碗の破片である。

37はSX18から出土した磁器である。青磁碗の口縁部の破片である。

38はSX19から出土したガラス製品である。近現代のインク瓶で、底部に「M」と陽刻されている。

39はSX66から出土した陶器である。瀬戸美濃の灰釉皿である。大窯1期のものと推定される。

40はSX66から出土した陶器である。瀬戸美濃の灰釉皿で、底部にトチンの痕がある。

41はSX66から出土した磁器である。青磁の碗で外

面には弧状の蓮弁紋が施されている。割れ口を膠状のもので接着している。概ね16世紀代のものと思われる。

42はSX66から出土した磁器である。青磁の碗で、内面に唐草状の割花紋が施されている。

43はSX66から出土した陶器である。瓷器系の甕の破片である。

44はSX66から出土した陶器である。珠洲系の甕の破片である。

45はSX66から出土した陶器である。珠洲系の擂鉢の破片である。

46はSX66から出土した陶器である。珠洲系の甕の破片である。

47はSX66から出土した石製品である。石鉢の口縁部で、被熱している。48と同一個体と思われる。

第12図

48はSX66から出土した石製品である。鉢の破片で、被熱している。47と同一個体と思われる。

49はSX66から出土した金属製品である。釘と見られ、全体に錆びている。

50はSX66から出土した古銭である。破片で、一部溶融した痕跡が見られる。銭名は読み取れない。

51はSX66から出土した金属製品である。用途不明の金属製品で、上部が欠損している。釘である可能性がある。

52は面整理作業で出土した磁器である。染付の碗である。

53は面整理作業で出土した瓦器である。火鉢の破片である。近代以降のものとみられる。

54は面整理作業で出土した瓦器である。火鉢の破片である。近代以降のものとみられる。

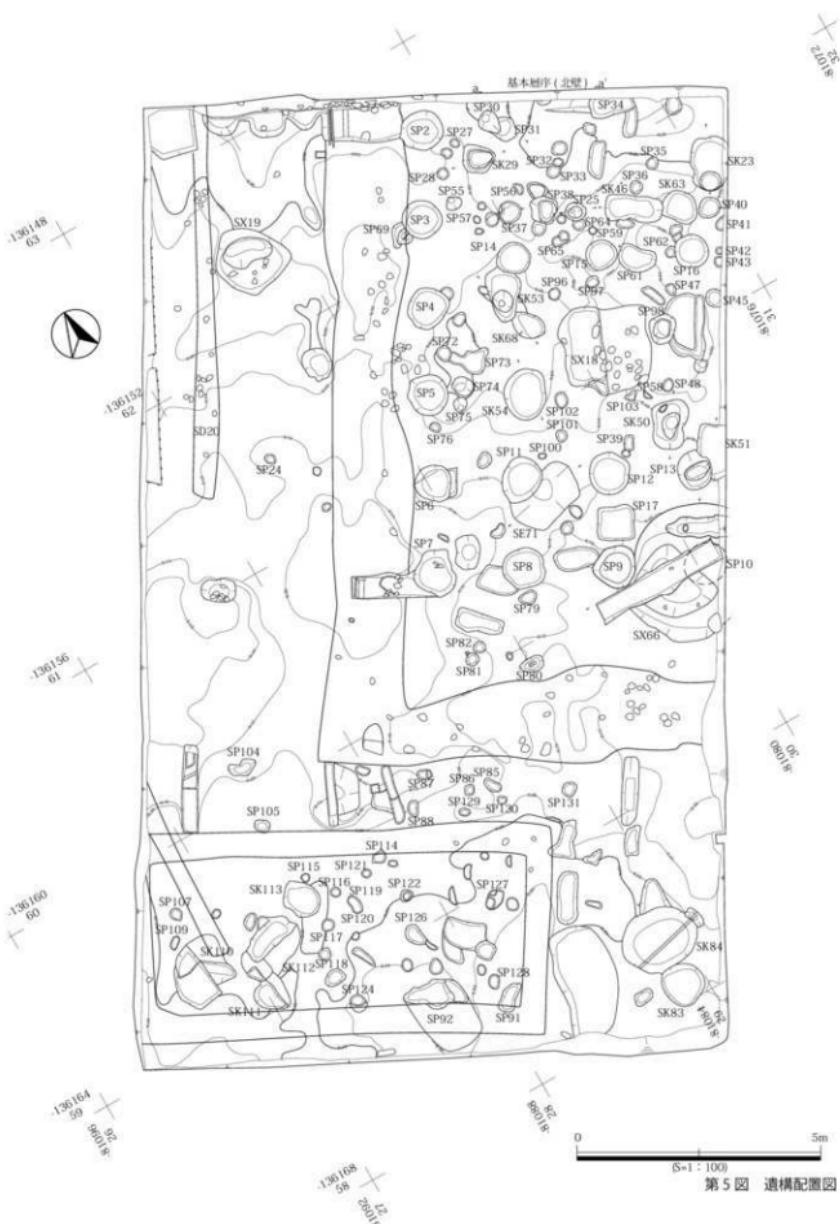
55は面整理作業で出土した平瓦で、学校施設のものとみられる。

56は面整理作業で出土した石製品である。砥石で中砥と見られる。

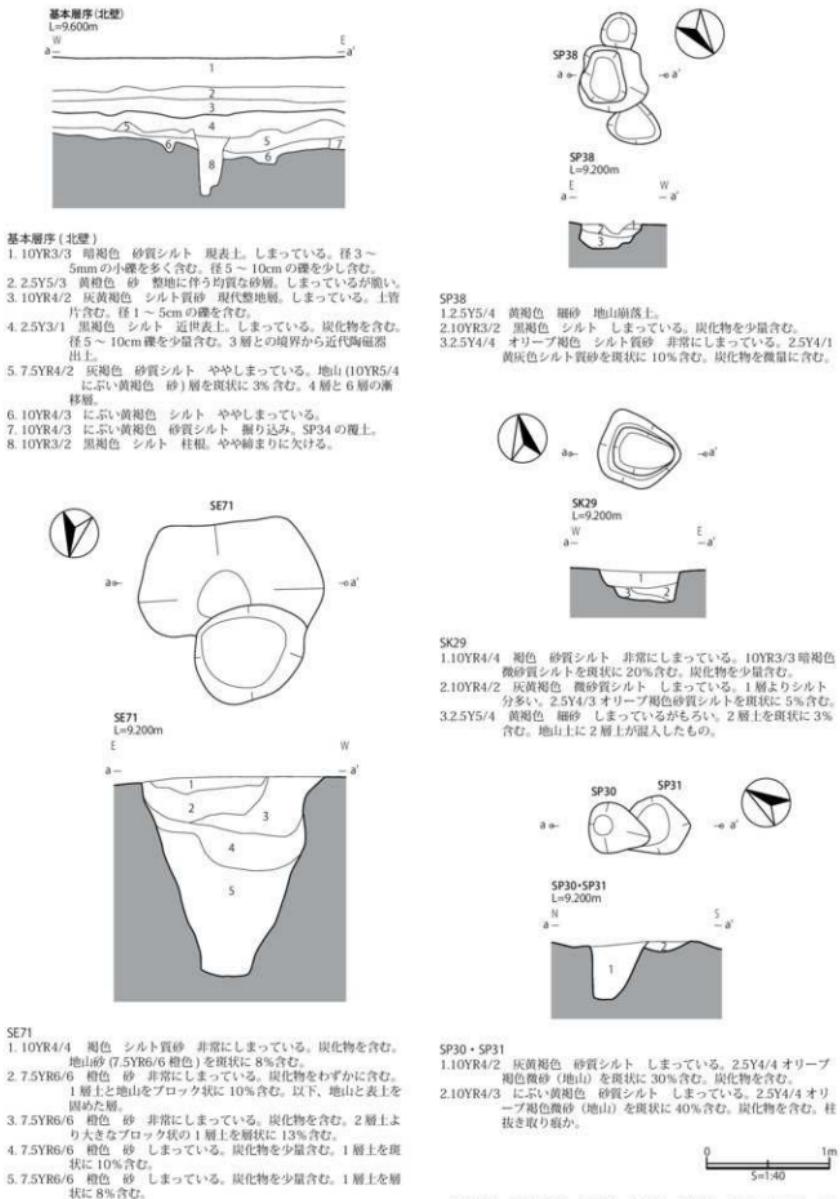
57は面整理作業で出土した磁器である。青磁の碗で、見込部分に植物紋の印刻が施されている。被熱している。

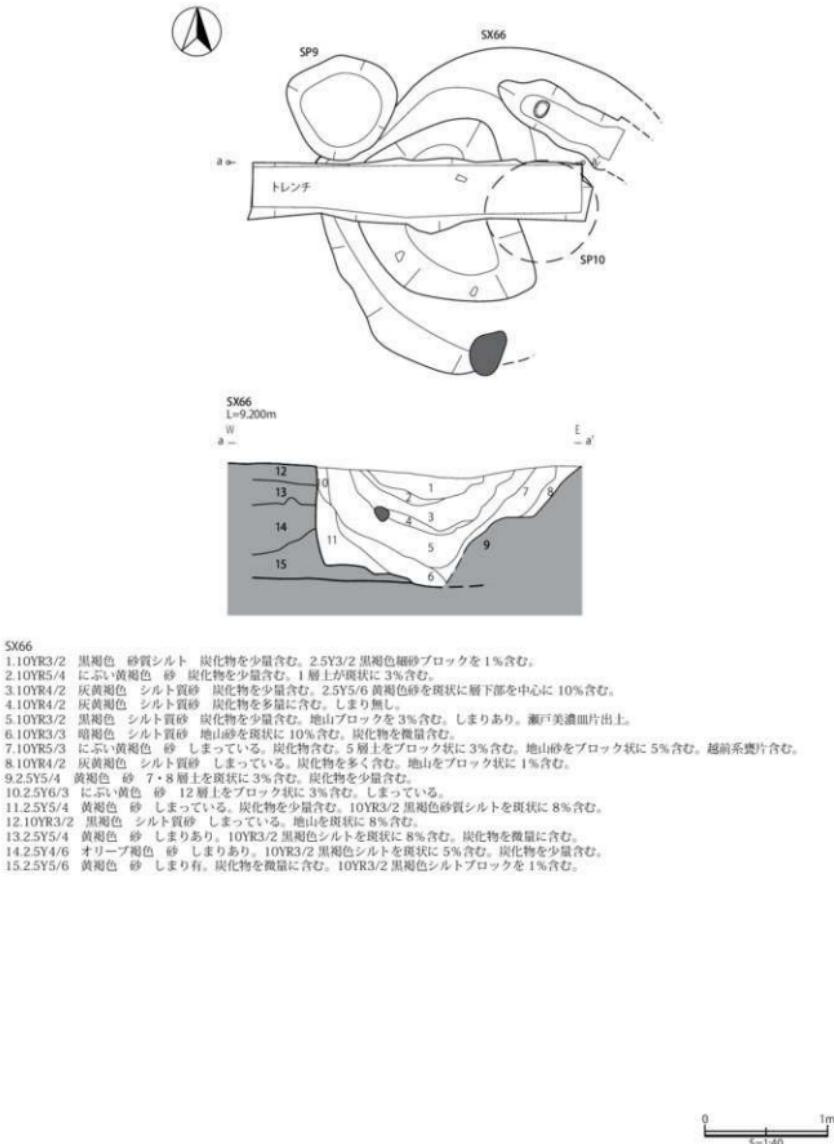
58は面整理作業で出土した陶器である。珠洲系の甕の破片である。

59は面整理作業で出土した古銭である。「開元通寶」で、銭名ははっきりしている。

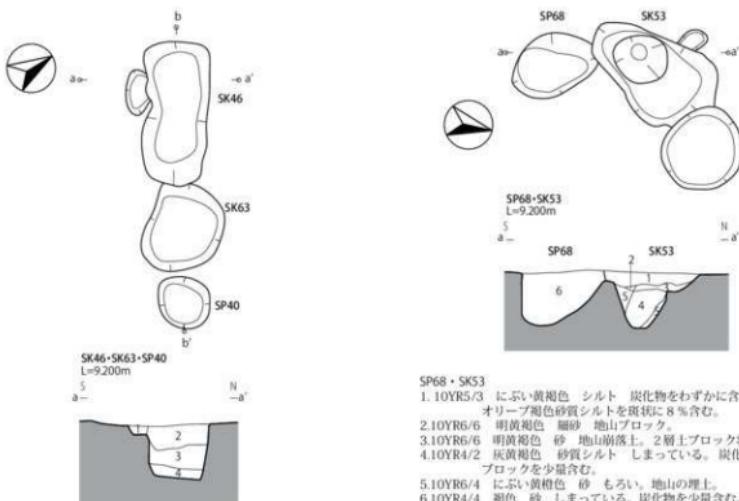


第5図 遺構配置図



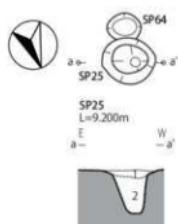


第7図 SX66



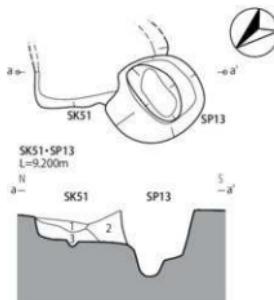
SK46・SK63・SP40
L=9.200m
N—
a—
b'

1.10YR5/3 單褐色 砂質シルト 非常にしまっている。炭化物を微量に含む。
2.5Y5/4 黄褐色(地山砂) ブロックを 1% 含む。
2.10YR4/2 灰黃褐色 シルト質砂 非常にしまっている。炭化物を多く含む。底土を微量、地山ブロックを 3% 含む。
3.10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質シルト 非常にしまっている。地山を現状に 5% 含む。炭化物を微量含む。
4.2.5Y5/4 黄褐色 砂 地山に 3 層以上現状に 10% 含む。
5.10YR5/3 にぶい黄褐色 非常にしまっている。炭化物をわずかに含む。地山砂ブロックを 2% 含む。



SP25
1.10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質シルト 非常にしまっている。炭化物小片を微量に含む。2.5Y4/4 オリーブ褐色(地山) をブロック状に 3% 含む。
2.10YR3/3 單褐色 砂質シルト 炭化物小片微量に含む。地山ブロックを 1% 含む。

SP68・SK53
1. 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト 炭化物をわずかに含む。2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質シルトを斑状に 8% 含む。
2.10YR6/6 明黄褐色 砂 地山崩落上。2 層上ブロック状に 30% 含む。
3.10YR6/6 明黄褐色 砂 地山崩落上。2 層上ブロック状に 30% 含む。
4.10YR4/2 灰黃褐色 砂質シルト しまっている。炭化物・焼土小ブロックを少量含む。
5.10YR6/4 にぶい黄褐色 砂 もろい、地山の埋土。
6.10YR4/4 浅色 砂 しまっている。炭化物を少量含む。

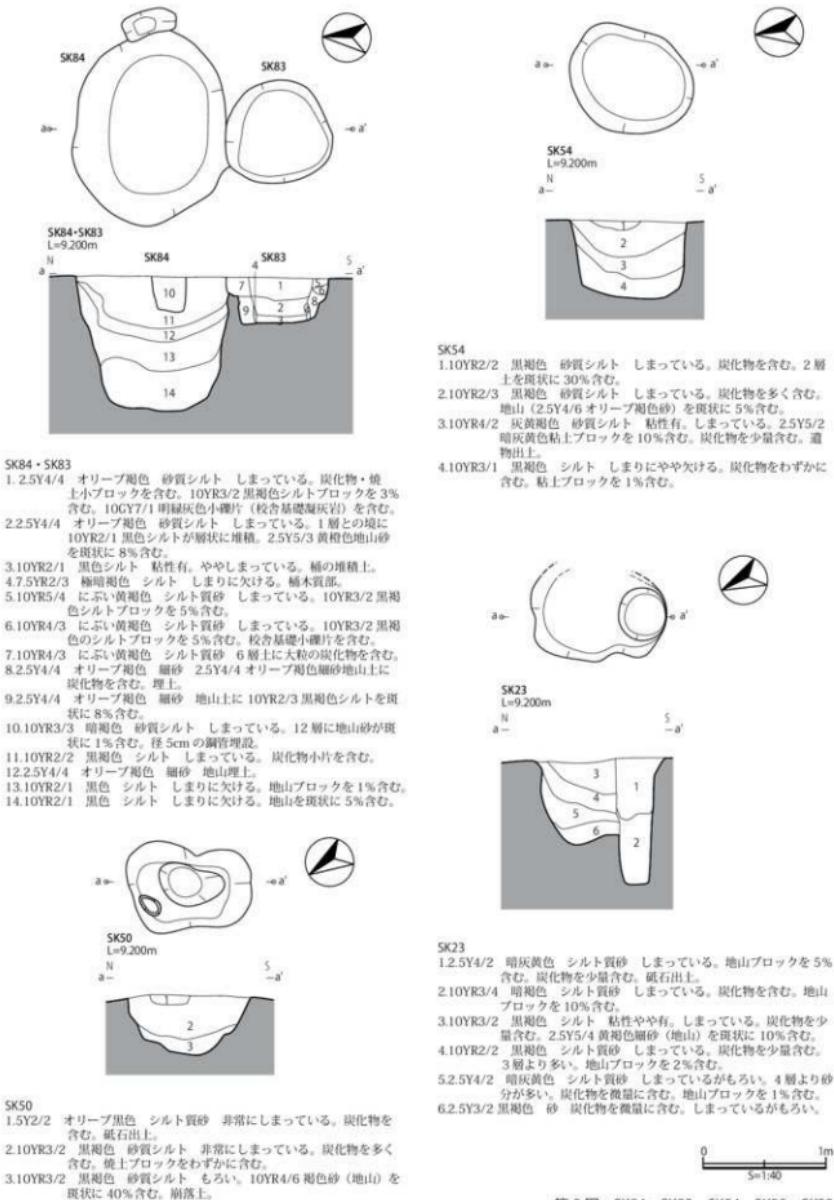


SK51・SP13
1.10YR4/2 灰黃褐色 砂質シルト 非常にしまっている。炭化物と焼土ブロックを多く含む。10YR5/4 にぶい黄褐色地山砂ブロックを 5% 含む。基本層序最下層と同じ落ち込み。
2.10YR3/1 黑褐色 砂質シルト しまっている。炭化物を多く含む。
3.10YR2/2 黑褐色 シルト しまっている。粘性あり。炭化物をわずかに含む。底土ブロックをわずかに、地山ブロック 1% 含む。



第8図 SK46・SK63・SP40、SP68・SK53、SP25、SK51・SP13

III 調査の成果



第9図 SK84・SK83、SK54、SK50、SK23



III 調査の成果



第11図 出土遺物(2)

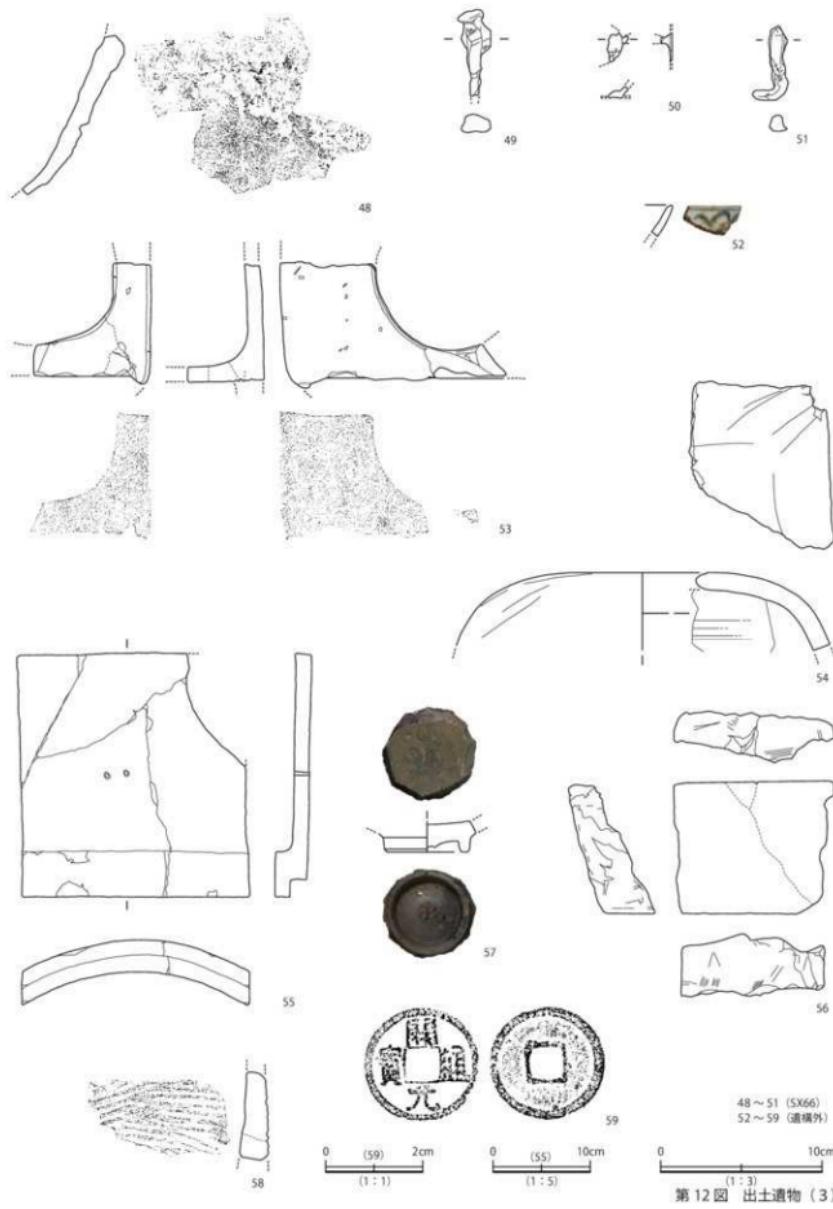


表3 遺物観察表（2）

図版 番号	種別	器種	遺構 層位	寸法 (mm)				調整 内面	装飾・ 施釉	備考
				口径	底径	器高	外面			
11 41	磁器	碗	SX66	(132.0)	(30.0)	ロクロ	ロクロ		内外施釉	割口に膠付着 外面部縦溝有紋 青磁
11 42	磁器	碗	SX66 F		(29.0)	ロクロ	ロクロ		内外施釉	内面に唐草状紋 青磁
11 43	陶器	甕	SX66 F		(135.0)	ナデ	ナデ		内外施釉	瓷器系陶器
11 44	陶器	甕	SX66 F		(44.0)	タタキ	アテ		無施釉	珠洲系
11 45	陶器	擂鉢	SX66 F		(47.0)	ロクロ	ロクロ		無施釉	内面に鉢目 珠洲系
11 46	陶器	壺	SX66 F		(107.0)	ナデ	ナデ		無施釉	珠洲系
11 47	石製品	石鉢	SX66 F		(54.5)	豊痕	豊痕		無施釉	被熱
12 48	石製品	石鉢	SX66 F		(93.5)	豊痕	豊痕		無施釉	被熱 外面剥離 内面下半は摩耗
12 49	金属製品	釘	SX66 F	(53.0)	(20.0)	11.0				全体が錆びている
12 50	金属製品	古銭	SX66 F	(18.0)	(13.0)	(7.0)				先端(下端)損傷
12 51	金属製品	用途不明製品	SX66 F	(46.0)	(22.0)	10.0				熱で融けた状態か 釘か
12 52	磁器	碗	6127G		(19.0)	ロクロ	ロクロ		内外施釉	染付
12 53	瓦器	火鉢	6128G		(81.0)		ナデ		無施釉	近代以降
12 54	瓦器	火鉢	6128G		(48.0)				無施釉	近代以降
12 55	瓦	平瓦	6128G	261.0	243.0	69.0	ナデ	ナデ	内外施釉	鉄輪 釘孔2か所
12 56	石製品	砾石	6128G							中磁
12 57	磁器	碗			50.0	(19.0)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り 内外施釉	見込に植物紋印刷 被熱 青磁 RP2
12 58	陶器	甕	線掘り			(48.0)	タタキ	アテ	無施釉	珠洲系
12 59	金属製品	古銭		23.5	23.5	1.0				「開元通寶」

IV 調査のまとめ

これまで藤島城跡は、6次におよぶ発掘調査が実施され、今回は第7次発掘調査である。

以前の調査では、遺構の分布密度が高く多くの柱穴、土坑、井戸跡などの他、土壁の痕跡や内堀跡などが検出され、遺物も多く出土している。

今回の発掘調査は、山形県立庄内農業高等学校ライスセンター改築事業として、平成30年度に237.6m²を対象として実施した。

調査区全体に、近現代の盛土が施されていたが、学校施設の基礎や掘り込みなどによる削平を部分的に受けている。検出遺構は質量ともに以前の調査と比べると劣る。調査区の東半分に遺構が多く、西側には少ない。南側の土坑やピットは学校施設に伴うものと思われ、城跡のものと断定できる遺構は少ない。全体的に、検出した遺構は柱穴が殆どで、調査区の制限等もあり掘立柱建物など明確な建物跡を確認することはできなかった。

また、遺物の出土量も少なく破片が多かったことから、明確な年代を推定することは難しかった。

以下、今年度の成果をまとめる。

遺構については、SX66、SE71の井戸跡とみられる大型遺構を確認した。過去の調査では、井戸枠を作う井戸跡も検出しているが、今回の調査ではいずれも井戸枠の痕跡も確認できなかった。このことから、城が機能している期間に井戸枠を掘り出し廃絶、または転用したと推測される。

SK23、SK50、SK51、SK54などは掘立柱建物に伴う

大型の柱穴とみられる。明確な柱痕はSK23だけで確認された。他の柱材は掘り起こして抜き取ったとみられる。

SK83、SK84などの調査区南側にある遺構は、埋土が黒褐色をしていたり、大型のブロック土を含むなど、明らかに新しいと思われ、学校施設の跡と推測される。

遺物については、小片が多く時期の特定は困難であったが、室町時代の15～16世紀と近代以降に二分できる。

陶器は瀬戸美濃系で、灰釉の皿が多数を占め、甕や壺類は珠洲系、瓷器系である。

磁器は青磁と染付が出土した。いずれも中国産の輸入磁器で、陶器と比較すると若干年代が古く15世紀代と思われる。器種は碗のみで、壺などはみられない。

瓦器では香炉が出土した。

石製品では、砥石と石鉢が出土した。いずれも以前の調査でも出土している。砥石はいずれも割れており、石鉢も被熱し破損していた。

金属製品は、古銭が出土している。銘名を判読できるものは宋銭のみであった。

以上のことから、今回の藤島城跡第7次発掘調査では、これまでの調査同様に15～16世紀の藤島城が最も栄えた時期の遺構遺物を確認できたが、詳細な時期や役割などは判明しなかった。

遺跡が学校敷地に位置しているという性格上、どうしても断片的な調査の繰り返しとはなるが、これらの成果を組み合わせることで、今後藤島城の歴史的役割が明らかになることを期待したい。

引用・参考文献

- 鶴岡市史編さん委員会編 1977 『筆遺余理上巻』鶴岡市史資料篇 莊内史料2
- 鶴岡市史編さん委員会編 1978 『筆遺余理下巻』鶴岡市史資料篇 莊内史料3
- 山形県 1925 『山形県史蹟名勝天然記念物調査報告 第一編』
- 山形県教育委員会 1979 『庄内藤島城跡-河川改修にともなう外郭西側の緊急発掘調査』山形県埋蔵文化財調査報告書第25集
- 山形県教育委員会 1990 『藤島城跡第2次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第159集
- 山形県教育委員会 1990 『藤島城跡第3次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第160集
- 山形県教育委員会 1992 『藤島城跡第4次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第181集
- 山形県教育委員会 1993 『藤島城跡第5次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第193集
- 山形県埋蔵文化財センター 1994 『藤島城跡第6次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター報告書第10集

写真図版



調査区全景（遺構検出段階：上が西）



調査区全景（遺構完掘状況：上が西）



調査区遠景（北から）



調査区遠景（北西から）



調査区全景（調査前：南から）



調査区北壁基本土層（南から）



調査区東壁基本土層（西から）



SE71 土層断面（北西から）



SE71 完掘状況（西から）



SP38 土層断面（北から）



SK29 土層断面（南から）



SP30（奥）・31（前）土層断面（南から）



SK46 土層断面（東から）



SK46（左）・SK63 土層断面（南から）



SK46 完掘状況（北西から）



SX66 土層断面（南東から）



SX66 完掘状況（南から）



SK51 土層断面 (南西から)



SK51 完掘状況 (南西から)



SK84 (左)・SK83 (右) 土層断面 (北西から)



SK84 完掘状況 (東から)



SK54 土層断面 (西から)



SK50 土層断面 (西から)



SK50 完掘状況 (東から)



SK23 土層断面 (北西から)



SE71、SD20、SK23・50・54・84、SP5 出土遺物



28



33



39



41



38

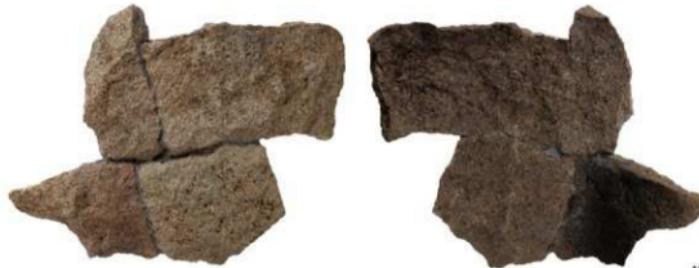


44

45



47



48

SP7 • 57、SX19 • 66 出土遺物



49



50



51



53



54



55



58



56



59

SX66、遺構外出土遺物

報告書抄録

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 232 集

藤島城跡第 7 次発掘調査報告書

2019 年 3 月 31 日発行

発行 公益財團法人 山形県埋蔵文化財センター
〒 999-3246 山形県上山市中山字壁屋敷 5608 番地

電話 023-672-5301

印刷 田宮印刷株式会社
〒 990-2251 山形県山形市立谷川 3 丁目 1410 番 1 号
電話 023-686-6111

この PDF データは下記の報告書を底本として作成しました。
閲覧を目的としていますので、詳細な写真や図面が必要な場合は、底本を参照して下さい。
底本は、公益財団法人山形県埋蔵文化財センター、山形県内の市町村教育委員会、図書館、
各都道府県の埋蔵文化財センター、考古学を教える大学、国立国会図書館等に所蔵されています。
所蔵状況や利用方法は、直接各施設にお問い合わせ下さい。

書名：藤島城跡第 7 次発掘調査報告書

発行：公益財団法人山形県埋蔵文化財センター

〒 999-3246

山形県上山市中山字壁屋敷 5608 番地

電話 :023-672-5301

URL:<http://www.yamagatamaibun.or.jp/>

mail:yac@yamagatamaibun.or.jp

電子版作成日：2019 年 4 月 12 日